

未来をデザインする資質・能力形成のための社会科授業開発 (Ⅱ) - 第6学年単元「世界の中の日本」の場合 -

Developing a Social Studies Plan for Cultivate Practical Qualities and Competencies to Instructional Design the Future (Ⅱ): A Case of "Japan in the World" in the 6th Grade.

關 浩 和* 山 内 敏 男** 福 田 喜 彦** 阪 上 弘 彬***
SEKI Hirokazu YAMAUCHI Toshio FUKUDA Yoshihiko SAKAUE Hiroaki

吉 水 裕 也**** 伊 藤 文 彬***** 東 宇 孝 浩***** 安 永 修*****
YOSHIMIZU Hiroya ITO Fumiaki TOU Takahiro YASUNAGA Osamu

森 清 成***** 小 寺 研*****
MORI Kiyonari KODERA Kei

本研究は、社会科授業開発を通して、子どもが、未来をデザインするための資質・能力形成のあり方を探るものである。第2年次となる今年度は、第6学年単元「世界の中の日本」の開発・実践を行った。「百の診療所より、一本の用水路を」を合い言葉に、2003年からアフガニスタン東部で用水路建設に着手し、2019年までに、約27kmに及ぶ用水路が開通し、16,500haの土地を潤し、砂漠を緑地に回復させ、約65万人の農民の暮らしを支えるという立派な国際貢献を続けてきた中で、銃撃事件。医師である中村哲さんが、なぜ、用水路づくりを始めたのかを取り上げた実践である。国際協力による諸外国との相互理解や相互依存にかかわる情報の収集・整理とその理解の他、多面的・多角的に国際協力の意味を考え、これからの日本の国際協力の在り方について自分の考えをもち表現する資質・能力形成が、振り返りシートのポートフォリオ形式の評価により明らかになった。

キーワード：社会科、資質・能力、未来デザイン、国際協力、世界の中の日本

Key words: social studies, competencies, design the future, international cooperation, Japan in the world

1 問題の所在

本研究は、社会科授業開発を通して、子どもが、未来をデザインするための資質・能力形成のあり方を探るものである。兵庫教育大学と兵庫教育大学附属小学校社会科部の連携による社会科授業研究は、テーマを「未来をデザインする資質・能力形成のための社会科授業開発」として進めている。2か月毎に定期的に会合をもち、共同研究者全員で単元デザインや学習指導案に関して議論を交わしている⁽¹⁾。昨年度は、第5学年単元「日本の工業生産（自動車産業）」において、2030年という未来社会を想定し、その時代に走る車の機能や役割をイメージし、三木市緑が丘の自動運転を活用しての町づくりにおいて、資質・能力形成の有効性が、未来予想図案

作成や振り返りシート（授業記録）をポートフォリオ的に蓄積して、資質・能力形成過程を把握し、評価した。

研究成果は、以下の通りである。第一は、未来予測させる時期が2030年と限定されている点である。限定することによって、起こりうる未来が予測しやすくなった点である。第二は、起こりうる未来の予測に留まらず、代案としての望ましい未来を考えさせようとしたことである⁽²⁾。代案の提示のために、批判的に思考したり、知識を総合する必要が生じるため、第5学年の子どもが納得をもって理解させていくプロセスの意義は大きい。一方課題も指摘された。社会科授業における有意味なコンテクスト（脈絡）で学んだ概念を基にしたものの見方・考え方を深めるためには、三木市の事例から想定する将

*兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻小学校教員養成特別コース 教授

令和2年6月30日受理

**兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻社会系教科マネジメントコース 准教授

***兵庫教育大学教員養成・研修高度化センター 助教

****兵庫教育大学理事（副学長）

*****兵庫教育大学附属小学校 教諭

*****兵庫教育大学附属中学校 教諭

*****明石市立鳥羽小学校

*****姫路市教育委員会

来のビジネスモデルを考えさせる学習場面により時間を設ける必要があると分析されているが、本時及び第三次での未来デザインの場において深められなかったことが示唆されるとともに、個性的な資質・能力の形成が見られたと考えられる子どもにおいても最終段階で作成した未来予想図では、安全についての言及が暗黙的であり、最終的に既存の知識を統合しているとはいえないと評価された。本単元は、産業学習の単元において、単元目標は未来をデザインするための資質・能力の育成であったが、クルマ自体ではなく、むしろ新しい機能を搭載したクルマが走る社会のデザインを、起こりうる課題を踏まえた上で、それらを解決する代案（望ましい未来）として提示する必要があるが、実践において、そこに時間がかけられていないことに大きな課題が指摘されるとともに、未来デザインする力を見取る評価の仕方などについては課題として残った。そこで、今年度は、昨年度の反省を踏まえて、これまでの研究成果を活かせるように、第6学年単元「世界の中の日本」において、資質・能力形成過程における子どもの成長を評価するために、次の手順で研究に取り組む。

- ①授業実践の中で、子どもの学びの過程や成果を文章や図で表現する。
- ②授業実践の過程で、子どもの学びの過程を小単元ごとに子ども自身の考えを表現させ、振り返りシート（授業記録）をポートフォリオ形式に保存する。
- ③子どもの振り返りシートを質あるいは量の両面から分析し、資質・能力の形成過程を評価し、次の実践に活かせるようにする。（關 浩和）

2 授業構成のねらいと実際

2.1 教材解釈

開発途上国では、貧困や飢餓、環境破壊などの様々な問題を抱えている。このような問題を解決するために、日本では政府主体のODA（政府開発援助）や民間主体のNGO（非政府組織）による活動が活発に行われている。日本のODAは、1954年から開始され、現在でも開発途上国の発展、生活の向上に大きく貢献している。日本のODAを分類すると、資金を提供する方法（有償・無償資金協力）と人材を育成する方法（技術協力）の二つがある。本単元では、技術協力の一つである青年海外協力隊を事例として、ODAが果たす役割を考えていった。具体的には、授業者自身がパラグアイの小学校で行った算数教育の改善の活動を取り上げた。パラグアイの小学校では、教育環境が整っていない、教材が不足しているなどの問題があった。そのような環境下で、授業者は授業改善や現地教員の育成などを行った。この事例では、子どもや教員を育てることが開発途上国の自立的・持続的な発展につながるという草の根活動の重要性が捉えられると予想した。さらに、青年海外協力隊の派遣後に開発途上国の日本への信頼度が高まっている事実や、2011年の東日本大震災では開発途上国からも多くの援助が届いた事実を提示することで、相互理解や相互依存

という国際協力の意味にも気付くことができると考えた。一方、NGOの事例として、ペシャワール会代表中村哲さん（2019年12月逝去）のアフガニスタンでの活動を取り上げた。医者である中村哲さんが用水路建設に励む理由を考える中で、戦争や大干ばつ、環境問題というアフガニスタンの社会背景の理解を図った。さらに、「百の診療所よりも一本の用水路を」⁽³⁾という言葉に込められた中村哲さんの思いに迫ることで、現地の人々にとって本当に必要な支援を行うことが大切であるという国際協力に関する新たな認識を構築できると考えた。このように本単元では、世界の問題に対する日本のODAやNGOの活動を具体的に調べる中で、国際協力の意味について考えを深めていくことをねらいとした。

以上を踏まえて、本単元の留意点について三点述べる。一つ目は、世界との出会いの場を工夫することである。子どもたちにとっての世界は、物理的にも心理的にも遠い存在である。そのため、授業者が生活したことのあるパラグアイを単元の入り口とすることで、世界を身近に捉えるきっかけづくりになると考えた。二つ目は、ODAとNGOの具体的な事例を取り上げることである。これらの事例を学習していく中で、開発途上国の自立的・持続的な発展のための支援、相互理解や相互依存の深まり、現地の人々のニーズに合わせた支援など、国際協力の意味を多面的・多角的に捉えることができるようになると思った。三つ目は、単元の終末にこれからの日本の国際協力の在り方を考える場面を設定することである。具体的には、日本のODA予算が減少している事実に出会わせることで、日本の財政状況を考慮に入れながら、ODAやNGOの役割を総合的に捉え、これからの日本の国際協力の在り方を多様な見方で考えられるようにした。

2.2 単元「世界の中の日本」の指導計画

2.2.1 単元の目標

日本のODAやNGOの活動を具体的に調べる活動を通して、多面的・多角的に国際協力の意味を考えるとともに、これからの日本の国際協力の在り方について自分なりの考えをもち、表現することができる。

2.2.2 単元の評価規準

○日本は開発途上国の自立的・持続可能な発展のために国際協力を実施しており、その活動によって諸外国との相互理解や相互依存が深まっていることを理解できる。また、世界で起こっている問題やそれを解決するための日本の取り組みを本やインターネットなどを活用して調べたり、国際協力の意味を考えるために必要な情報を収集して、整理したりできる。

【知識・技能】

○日本のODAやNGOの事例を追究していく中で、多面的・多角的に国際協力の意味を考えるとともに、これからの日本の国際協力の在り方について自分の考えをもち表現できる。【思考・判断・表現】

○国際協力の意味や在り方を考えることを通して、世界の状況に興味・関心をもつとともに、自分から積極的

に世界とかかわろうとする。

【主体的に学習に取り組む態度】

2.3 授業の実際

本授業は、兵庫教育大学附属小学校 2019 年度 6 年 1 組 30 名（男子 12 名、女子 18 名）を対象学級として、調査期間は、2020 年 1 月 10 日（金）～2 月 13 日（木）である⁽⁴⁾。表 1 の単元のプランをもとに、授業の実際を時系列に論じる。単元を構成する際に、拠り所になっているのが、本校社会科部で作成している「資質・能力の評価の枠組み」である。本単元に身に付けられる資質・能力を明らかにしたものが表 2 である。

2.3.1 第一次 世界が抱える問題

本単元の「世界の中の日本」は、本学級の子どもたちが、初めて現代の世界について詳しく学習する単元であった。そのため、子どもたちが世界を身近に感じられるように、単元の導入では、授業者が青年海外協力隊で活動したことがあるパラグアイを事例地域として取り上げた。第 1・2 時ではまず、パラグアイの人口や面積、気候などの地理的側面を日本と比較しながら捉えた。例えば、気候では雨温図を読み取らせることで、日本よりも暑い国であること、パラグアイは南半球に位置するので日本と季節が反対になることを理解することができた。また、経済的側面では大豆の輸出量や就農率などを提示し、パラグアイの主産業が農業であることを確認した。さらに、日本や南米諸国の GDP（国内総生産）とパラグアイのそれとを比較させることで、パラグアイは南米の中でも貧困国の一つであることに気付くことができた（2018 年の日本の GDP は 535 兆円、ブラジル 202 兆円、パラグアイ 4 兆円であった）。次に、第 3 時では、授業の導入で図 1 を提示することで、「義務教育なのに、（パラグアイでは）なぜ 73% の子どもしか小学校を卒業できないのだろう」という課題を形成することができた。この課題に向けて資料追究する中で、子どもたちは、教科書・教材不足などの教育制度の問題だけでなく、インフラの未整備、貧困、そして子ども労働などパラグアイが抱える社会問題も小学生の就学率に影響を与えていることを理解することができた。また、地域別の貧困率と月収の違い（都市：53,900 円、農村：30,620 円）を示すことで、パラグアイでは都市と農村で

貧困の格差が激しいことを把握することができた。これらの問題の一般化を図るために、第 4 時では教科書や資料集を活用して、世界が抱える問題について調べた。この学習で子どもたちは、環境問題のように地球規模の問題もあるが、紛争や貧困などのように、開発途上国に集中している問題もあることに気付くことができた。そして、第 5 時では国際連合の働きに焦点を当てることで、第 4 時で学習した問題を解決するために、世界の国々が協力し合っていることを捉えさせた。また、資料集の記述から日本独自でも ODA や NGO が世界の問題に対して活動していることを読み取らせることで、第二次の学習につなげることができた。

2.3.2 第二次 国際協力の意味

第 6 時ではまず、日本の ODA には大きく有償資金協力、無償資金協力、技術協力の三種類の支援方法があることを押さえた。その中でも、有償資金協力や無償資金協力の概要をつかむために、パラグアイのインフラ整備を取り上げた。具体的には、約 48 億円の有償資金協力によって道路や橋が、約 16 億円の無償資金協力によって浄水場が整備されたことを学習した。また、それぞれのインフラが整備される前と後の写真を比較させることで、これらの資金協力によって、人々の生活が改善されたことを子どもたちは理解することができた。授業の最後に、日本の無償資金協力によって建設されたカンボジアの橋が、国の紙幣のデザインになっている事例を取り上げ、「なぜ、カンボジアの紙幣のデザインになったのか」と発問した。すると、子どもたちは「カンボジアの人々の生活が改善され、喜んでいるから」や「日本の支援に対する感謝を伝えるため」という意見が出て、日本の ODA は開発途上国の人々にとって必要不可欠なものであることを実感できた。

次の第 7 時では、技術協力の中の青年海外協力隊を取り上げ、派遣の目的や歴史、派遣国、職種などの項目ごとに分けて、パンフレットを活用しながら調べる活動を行った。そして、より具体的に青年海外協力隊の活動を把握するために、第 8 時には、授業者がパラグアイで経験した算数教育の改善の活動を事例に学習を進めた。そこでは、写真や動画を見せながら活動の様子を説明した後に、「私（授業者）は、なぜパラグアイの子どもよりも先生に指導する方を重視したのか」と発問した。すると、子どもたちは「パラグアイの先生が日本の教え方の良さを実感できるように」や「授業者が日本に帰国しても、自分たちで活動できるように」と考えた。そして、パラグアイ人が自立して、活動を続けていけるような持続可能な支援を行うことが大切であるという国際協力の意味を考えることができた。第 9 時では、ODA のメリットについて考える授業を展開した。青年海外協力隊の派遣を機に、配属先の日本への信頼度や、隊員自身の異文化理解度が高まっていること分かるアンケート結果を示すことで、相互理解が深まっていることを理解した。さらに、2011 年の東日本大震災のときに、パラグアイから無償で 100t の大豆が提供された事実を伝え

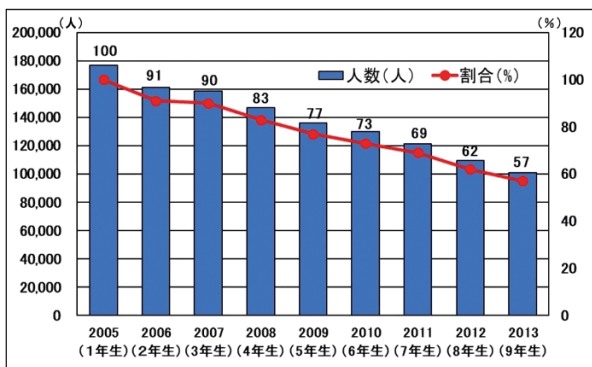


図 1 2005 年に小学校に入学した子どもの人数の変化

出典：『Anuario 2015 Paraguay』⁽⁵⁾より筆者作成

表1 単元プラン (全14時間)

(○: 1時間 ◎: 2時間)

| 学 習 活 動 | | 教師の働きかけ |
|--|--|---|
| 第一次 世界が抱える問題 5時間 | <p>◎パラグアイについて知ろう。</p> <p>○パラグアイの社会背景から、73%しか小学校を卒業できない理由を考える。</p> <p>○世界には、さまざまな問題があることを知る。</p> <p>○世界のさまざまな問題に対して、世界ではどのような取り組みが行われているのかを調べる。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・授業者が暮らした経験のあるパラグアイの事例により世界との出会いを身近に感じられるようにする。また、写真や統計資料を活用することで、地理、気候、言語、衣食住などの視点から、パラグアイの暮らしが捉えられるようにする。 ・貧困率の地図や都市と農村の月収の資料を提示することで、パラグアイでは都市と農村で格差が大きいことが理解できるようにする。また、写真を活用することで、パラグアイの小学校の様子が具体的にイメージできるようにする。 ・開発途上国を表した地図と世界の問題を示した地図を比較させることで、世界の問題の多くが開発途上国に集中していることに気付けるようにする。 ・国際連合のしくみや働きに焦点を当てることで、第四時で明らかとなった問題を世界で解決しようとしていることに気付けるようにする。 |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 世界のさまざまな問題を解決するために、日本はどのような活動をしているのだろう。 </div> | | |
| 第二次 国際協力の意味 7時間 | <p>○日本のODAは、どのように使われているのかを調べ、日本のODAの一部である青年海外協力隊の活動状況や内容について知る。</p> <p>◎パラグアイの教育を改善するため、授業者は、青年海外協力隊として、どのような活動をしたのかを追究する。</p> <p>○日本がODAを実施するメリットについて考える。</p> <p>○NGO ペシャワール会が活動しているアフガニスタンについて知ろう。</p> <p>○医者である中村哲さんが用水路をつくった理由を考える。 【本時】</p> <p>○中村哲さんの死後、ペシャワール会の活動が続くのか予想する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・日本のODAで作られた橋が、カンボジアの紙幣の柄になった事例を取り上げることで、日本のODAが開発途上国にとって必要な支援であることを実感できるようにする。 ・派遣国、職種、派遣条件など項目立てて板書することで、青年海外協力隊の概要を整理しながら理解できるようにする。 ・「子どもの学習支援よりも、教師への研修を重視したのはなぜか」と問うことで、「現地の人たちで、継続的に活動ができるような支援が大切である」という国際協力の意味について考えられるようにする。 ・「東日本大震災のときに、パラグアイから100tの大豆が無償で提供された」という事実に出会わせることで、これまでのODAによって、日本と開発途上国との相互理解や相互依存が深まっていることを理解できるようにする。 ・第一時と同じ視点を活用することで、パラグアイや日本と比較しながらアフガニスタンの概要を捉えられるようにする。 ・「百の診療所よりも一本の用水路を」という中村哲さんの言葉の意味を考えさせることで、「現地の人々にとって本当に必要な支援を行うことが大切である」という国際協力の意味に気付けるようにする。 ・ODAとNGOの共通点を考えさせることで、両者とも持続可能な支援を行っていることに気付けるようにする。 |
| 第三次 これからの国際協力 2時間 | <p>◎日本のODA予算が減っている事実から、これからの日本の国際協力の在り方について考える。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・日本の財政状況を捉えさせながら、これまでに学習してきたODAやNGOの役割を想起させることで、今後の日本の国際協力の在り方を、多様な見方で考えることができるようにする。 |

表2 資質・能力の評価の枠組み

| 資質・能力の分類 | | | | |
|-------------|-----|---|---|--|
| | 次 | 知識・技能 | 思考・判断・表現 | 主体的に学習に取り組む態度 |
| 資質・能力を發揮した姿 | 第一次 | <p>事実的知識</p> <ul style="list-style-type: none"> 世界が抱えるさまざまな問題に気付くとともに、それらを解決するために世界には多くの組織があることを知っている。 <p>情報収集力</p> <ul style="list-style-type: none"> 本やインターネットなどを利用して、世界が抱える問題や国際的な組織の働きについて調べている。 | <p>問題発見力</p> <ul style="list-style-type: none"> パラグアイの事例から、世界ではどのような問題が起きているのかに疑問をもっている。また、その問題を世界や日本ではどのように解決しようとしているのかを単元を通して学習することを理解している。 | <p>意志力</p> <ul style="list-style-type: none"> パラグアイの事例をもとに、世界の人々の生活に興味・関心をもちながら、世界で起きている問題について意欲的に調べている。 |
| | 第二次 | <p>説明的知識</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本のODAやNGOの活動が、国際社会に大きく貢献しており、諸外国からの日本の信頼が高まっていることを理解している。また、日本もまた国際社会から援助を受けていることにも気付いている。 <p>情報活用力</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分で集めた資料や授業中に配布した資料を根拠にしながら、日本のODAやNGOの役割について考えている。 | <p>問題発見力</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本のODAやNGOがどのような活動しているのか疑問をもち、それらが果たしている役割について深く追究しようとしている。 <p>社会的思考力</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本のODAやNGOの事例を学ぶ中で、国際協力の意味について自分なりの考えをもっている。 | <p>意志力</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本のODAやNGOの活動を詳しく調べていく中で、意欲的に国際協力の意味を考えている。 <p>共感力</p> <ul style="list-style-type: none"> 立場や主張の違う人の意見を取り入れながら、国際協力の意味について自分の考えを深めている。 |
| | 第三次 | <p>概念的知識</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際協力というのは、開発途上国の自立的・持続可能な発展を支援することであり、その活動によって国同士の相互理解や相互依存が深まっていることを理解している。 | <p>社会的思考力</p> <ul style="list-style-type: none"> これまでに学習してきたODAやNGOの役割を総合的に捉え、これからの日本の国際協力の在り方を多様な見方で考えている。 | <p>社会参画力</p> <ul style="list-style-type: none"> これからの日本の国際協力の在り方を考える中で、自分から積極的に世界とかかわろうとしている。 |

た。すると、「これまでの支援に対する恩返しや感謝を伝えるために、日本に支援をしたのではないか」と考え、困っているときにはお互いに助け合う相互依存の関係が、日本のODAによって構築されていることが分かった。

第10時～第12時にかけては、アフガニスタンで活動するベシヤワール会の活動を中心に、NGOの役割について考えた。まず、第10時では、地理的側面や経済的側面などの第1時で活用した視点をもとに、アフガニスタンの概要を捉えた。そこでは、降水量が少ない砂漠地帯であること、大干ばつが起これば飢餓で苦しんでいる人々が多いこと、戦争やテロが勃発し治安が悪いことな

どの理由から、アフガニスタンはパラグアイよりも深刻な問題を抱えている国であるという認識を子どもたちはもった。

第11時の導入では、重機を使って用水路の建設に励む中村哲さんの写真【資料1】を見せた後、彼の本当の職業は医者【資料2】であることを明かした。すると、水を供給する会社の従業員だと予想していた一人の子どもが「医者なの？」とつぶやいた。すかさず、その驚きの声を全体に共有することで、「中村さんは医者なのに、どうして用水路をつくっているのだろうか」という課題を形成することができた。この課題に向けて子どもたちは、前時の資料を活用しながら、アフガニスタンの

自然条件（砂漠地帯）【資料3】や社会情勢（治安が悪い）【資料4】によって、安全な水が得にくい状況にあることを理解することができた。その後、用水路建設前後の町の様子を撮影した写真【資料5】を提示した。砂漠地帯だった町が、たった1年で小麦が育つ緑豊かな町に変容したことに、子どもたちは驚きを感じていた。そして、写真を見た感想を求めると、子どもたちは「ここで生活できそう」や「農業ができ、食料が増えそう」、「町が発展した」などの意見を次々と語り出した。本時の最後には、深刻な水不足で泥水を飲まざるを得ない子どもの写真を見せながら、「百の診療所よりも一本の用水路を」という中村哲さんの言葉【資料6】を紹介した。すると、子どもたちからは「診療所があっても水はきれいにならない」、「このままだと命が危ないので、安全な水を届けたい」、「診療所で助かる命は限られてしまうけど、用水路をつくれれば多くの命が助かり、幸せになる」といった意見が出て、医者でありながら用水路を建設する中村哲さんの思いに迫ることができた（図2の板書を参照）。

授業後、一人の子どもが中村哲さん逝去を伝える新聞記事（2019年12月12日読売KoDoMo新聞より）を持ってきた。そこで、第12時の導入ではその記事を活用し、「中村さんの亡くなられた後、ペシャワール会の活動は続いていくのだろうか」という課題で学習を進めた。続かない側の意見としては、「中村さんはペシャワール会の中心人物で、現地の人からも尊敬されているから」などのように、リーダーとしてペシャワール会をまとめてきた人物がいなくなった代償は大きいという意見が多かった。一方、続く側の意見としては、「アフガニスタンの問題は解決されていない」といった今後も支援の必要性を訴えるものや、「ペシャワール会の会員の中で、中村さんの意志を引き継ぐ人物がいるはずだ」という意見があった。話し合いを続ける中で、「中村さんは持続可能な支援をしていたのか」という疑問が生まれたので、用水路をつくる上で大切にしたい文書及び工事の様子を撮影した写真資料を提示した⁽⁶⁾。用水路をつくる上で大切にしたい文書資料のポイントは、①なるべく単純な機器で対処できること。②多大なコストをかけないこと。③ある程度の知識があれば、地域の誰もが工事

できること。④身近な素材を使い、地域にないものをできるだけ持ち込まないこと。⑤こわれても地域の人で修復できること、という五点である。

この資料を読み取ることで、「中村哲さんは持続可能な支援をしていた」ことを確認できた。さらに、「持続可能な支援とは、現地の人々で活動できるように支援することである」という概念を形成するとともに、「授業者がパラグアイで活動したときに、大切にしてきたことと同じである」というODAとNGOの支援の在り方の共通点を見出すことができた。

2.3.3 第三次 これからの国際協力

第13時には、1978～2019年度におけるODA予算の推移のグラフを示して、1997年度をピークに年々減少している事実を把握した。そして、減少している理由を日本の予算や借金の状況から考えていった。その後、「日本のODA予算は、これからどうしていくべきか」の考えをノートにまとめて、この時間を終えた。第14時では、前時にまとめた自分の考えを交流するところから始めた。授業前の子どもたちの内訳は、ODA予算を増やす0人、減らす21人、維持する7人であった。維持する派の意見は、日本のODAによって、日本の信頼度が高まったり、相互理解や相互依存が深まったりするという第9時で学習したODAのメリットを根拠にしていた。一方、減らす派の意見は、前時の日本の財政状況を根拠に、日本の借金を改善した上で、支援すべきだというのが多かった。ただし、完全になくすという子どもは一人もいなかった。それどころか、減らす派の子どもでも、「返済義務のない無償資金協力を減らして、利子をつけて戻ってくる有償資金協力や人材育成を目的とした技術協力を重点を置いた方がよい」や「NGOも国際協力に貢献しているのなら、そちらの活動を頼りにしてもよいのではないか」といった代替案を出すことができた。授業後のふり返りでは、全ての子どもが減らすとなってしまったが、これまでの学習してきたODAやNGOの役割を総合的に捉えた上で、判断していた。このように、単元の終末に、ODA予算の問題点を取り上げたことで、単元に身に付けた資質・能力を活用しながら、これからの日本の国際協力の在り方について主体的に考える子どもの姿が見られた。（伊藤 文彬）

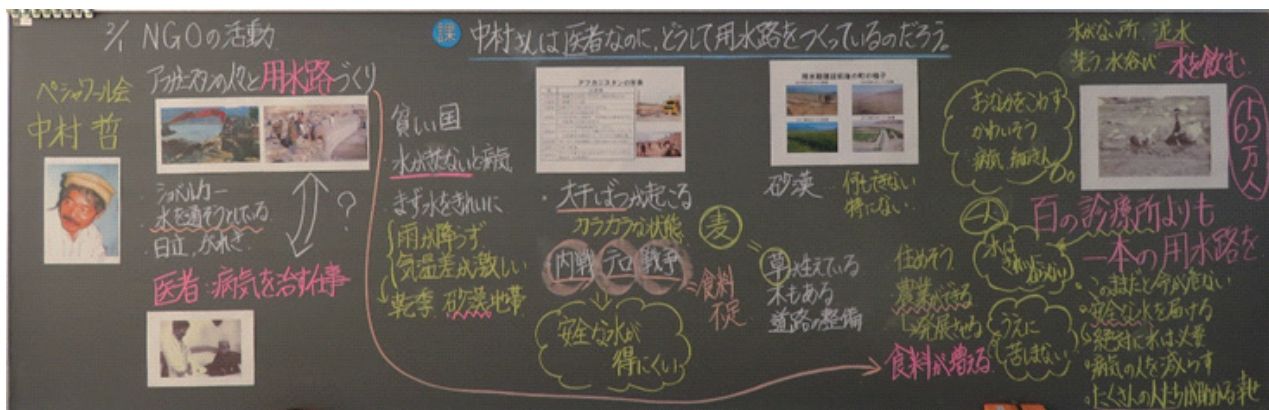


図2 アフガニスタンで活動する中村哲さんの活動を読み解いた板書

本時の学習課題：「中村哲さんは医者なのに、どうして用水路をつくっているのだろう」

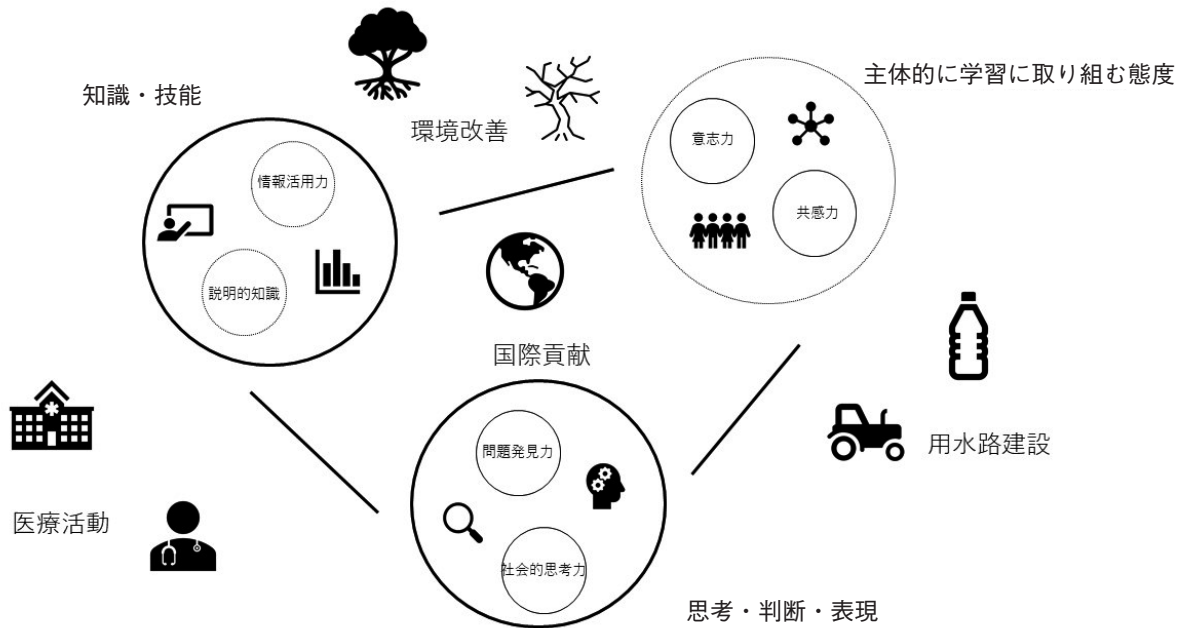


図3 「知識・技能」、「思考・判断・表現」の観点による本時の資質・能力の評価の枠組み（福田作成）

3 資質・能力形成過程の分析と評価

3.1 学級全体の資質・能力形成過程

3.1.1 本時における資質・能力形成過程の分析

本時の目標は、①医者である中村哲さんが用水路をつくる理由を考える活動を通して、アフガニスタンで水・食料不足が深刻化しているのは、国内情勢や環境問題などの社会背景が関係していることを理解することができる【知識・技能】、②現地の人々にとって本当に必要な支援を行うことが大切であるという国際協力の意味に気付くことができる【思考・判断・表現】の2点をねらいとしている。本時の展開場面では、「中村哲さんは医者なのに、どうして用水路をつくっているのだろう」という学習課題を設定して、5つの資料から探究させている。

本時における資質・能力形成のポイントとなるのは、本時で教師から提示された「工事する中村哲さん」、「診察する中村哲さん」、「干ばつの原因と地球の平均気温の変化」、「用水路建設前後の町の様子」、「中村哲さんの言葉」の5つの資料の関係性を子どもが読み解くことのできるような資質・能力を身につけるのかという点である。

まず、「工事する中村哲さん」と「診察する中村哲さん」の資料では、中村哲さんの活動の違いに気付かせることで、疑問を感じ、本時の課題を設定できるようにしている。子どもからの「医者が水を通すの?」といった驚きをもとにして、教師は共感的な学習課題を提示している。次に、「干ばつの原因と地球の平均気温の変化」の資料では、川や地下水などの水の流れに着目させることで、アフガニスタンでは深刻な水不足になっていること、水循環と地球の平均気温の資料を関連付けることで、地球規模での気温の上昇が、アフガニスタンの環境を脅かしていることを子どもに考えさせている。

さらに、「用水路建設前後の町の様子」の資料では、同じ地点での2枚の写真を比較させることで、用水路の建設後、荒廃した土地が緑豊かな大地へと変化し、人々が自活できるようになったことについて議論を促している。子どもからは、「1年後は草がたくさん生えている」「4年後には木も生えている」「道が整備されている」などの意見が出されている。そして、「中村哲さんの言葉」の資料では、本時の課題に立ち返らせながら、「百の診療所よりも一本の用水路を」という言葉に込めた中村哲さんの思いに迫ることで、現地の人々にとって本当に必要な支援を行うことが国際協力であることに気付かせている。

本単元の目標では、「日本のNGOの活動を具体的に調べる活動を通して、多面的・多角的に国際協力の意味を考えるとともに、これからの日本の国際協力の在り方について自分なりの考えをもち、表現することができる」ことをねらいとしている。本単元の「評価規準」の観点から学級全体の資質・能力形成過程を分析してみると、本時は第二次の「医者である中村哲さんが用水路をつくった理由を考える」の第11時に当たる授業である。

本単元では、資質・能力を発揮した姿として、【知識・技能】【思考・判断・表現】【主体的に学習に取り組む態度】の3つの観点から資質・能力の評価の枠組みが設定されている。本時の目標では、【知識・技能】【思考・判断・表現】の2つの観点が設定されているため、ここでは、【知識・技能】にある「説明的知識」「情報収集力」と【思考・判断・表現】にある「問題発見力」「社会的思考力」を評価の枠組みとして分析する。本時の「資質・能力の評価の枠組み」を示したのが図3である。本時で育成しようとする資質・能力の評価の枠組みから【知識・技能】【思考・判断・表現】の関係性をみてみると、「説明的知識」

と「社会的思考力」を結びつけるために、「情報収集力」と「問題発見力」の資質・能力を位置付けていることがわかる。では、子どもの資質・能力を形成するために本時で教師が提示した各種の資料はどのように機能したのだろうか。

3.1.2 本時における資質・能力形成と評価

本時において、資質・能力形成の要となっているのは、【知識・技能】【思考・判断・表現】の2つの観点である。図3で示したように、本時では、ペシャワール会で活動する中村哲さんが医師であるにも関わらず、なぜ、用水路を建設して地域社会の問題を解決しようとしているのかを子どもに探究させていくことが学習の中核的な問いとなっている。本時の学習場面でも資料読解の過程で子どもは中村哲さんの活動のギャップに興味・関心を抱いていた。そこで、教師はなぜ医療活動ではなく、土木事業に中村哲さんが力を入れているのかを資料から科学的に読み解き、用水路建設の資料によってどのように具体化されたのかを子どもに考えさせている。こうした日本とは異なる地域社会の問題をどのように解決するのか資料の中村哲さんの言葉から導こうとしている。本時では、気候変動に関する資料のみを読み解いていたが、国内情勢を把握するには、中村哲さんが活動した地域がどのような位置関係にあるのかを地図をもとに把握する必要がある。中村哲さんの著作である『天、共に在り』（NHK出版、2013年）によれば、アフガニスタンでの中村哲さんの国際貢献の軌跡とともに、本時の学習活動の舞台となった用水路と医療活動の拠点であった診療所の位置関係を把握することができる。だが、用水路建設に重点をおくことで、中村哲さんがハンセン病医療の専門家で長年の医療活動をもとにして、資料に提示されたような知見に至ったことを考えさせる場面が十分ではなかった。中村哲さんの医療活動を踏まえた上で、用水路建設の意味を考えさせることができれば、なぜ医療活動だけでは十分ではなく、用水路が必要なのかを子どもに深く考えさせることができたのではないか。そうすることによって、相互理解や国際協力の本質を捉えた学習活動を展開していくことが今後の課題となろう。（福田 喜彦）

3.2 抽出児の資質・能力形成過程

本節では、抽出児のノート記述を手がかりとして、本單元における資質・能力の形成結果を明らかにする。本研究では授業ごとにノートに本時の振り返り（第1時を除く）を記入させ、ポートフォリオ形式で保存している。ここではノートの記述の変遷を分析することで、資質・能力形成過程を検証する。

3.2.1 個性的な資質・能力の成長と社会認識形成との関係

ここでは、資質・能力形成過程を検証するために、概念獲得の過程が判明するに足る記述を要する子ども6名のうち、任意で抽出した子ども（A児）のワークシート記述から資質・能力の形成を分析し、その変容を紹介する（表3）。そして、子どもがどのような概念を獲得し、

社会との関わりを考えたか、どのような既存の知識を統合して未来をデザインできたかについて分析、検討を行う。

第1時および第2時において日本とパラグアイの比較を通してパラグアイの特徴を理解したのち、第3時でA児は「パラグアイは、貧富の差が大きいと、道が整備されていないという理由から農村の子どもたちは、学校へ通い続けることができず、卒業できる子どもが少なくなると分かった。」と記述するように、パラグアイの抱える貧困問題、そしてそれが教育にも影響を与えていることに気付いた。続く第4時では、世界的な諸問題の種類および諸問題間のつながりに関する気付きがノートの記述から読み取れる。第5時では「発展途上国を支援するために、国連、政府、民間が動いていると知った。」とあるように、問題解決のために働く組織についての記述がみられる。このように、A児は第一次で目指された「事実的知識」を獲得できたといえる。

第二次の第6時から第9時にかけてODAを通じて日本の国際協力の実情を知る過程では、第6時でA児はODAの無償資金協力の在り方に対して疑問を抱いた。続く第7時から第9時にかけて、授業者である伊藤教諭自身の経験をもとに紹介された青年海外協力隊、現地での子どもと大人に対する教育という人的側面からも支援がなされていることを知ることで、ODAに対する認識の変容がみられるとともにそのメリットを理解していた。また第9時では、ODAが一方的なつながりでなく、国相互の信頼関係（相互関係）の構築にもつながることも理解できていたことがノートの記述から読み取れる。

NGOの活動を取り上げた第10時から第12時では、まず第10時では第1時および第2時同様に、アフガニスタンが抱える固有の問題やその深刻さを指摘した。続く第11時（本時）ではNGO（ペシャワール会）の活動に焦点化され、中村哲さんの医者という立場でありながら用水路を作ったという一見するとつながりが見いだせない事実について、A児は「診療所があっても、何度も泥水を飲むことになると思うとすごく嫌になった（中略）中村さんはそれを分かって用水路を作ったんだと考えるとすごいなと思う。」と記述した。このことからA児は、医師でありながら用水路を建設した中村哲さん（ペシャワール会）の活動が、アフガニスタンが抱える水不足という問題の解決、ひいては水が得られることで多くの人を救うためであると理解したといえる。また中村哲さん死後のペシャワール会の活動が持続可能なものか否かを問いかけた第12時では、「ペシャワール会は無くなっては困ると分かった」とA児は記述した。ここでは前時の理解に基づいて、活動の継続性の必要性があると判断したと推測できる。

第二次のODAおよびNGOの両事例では具体的な人の活動（伊藤教諭、中村哲さん）を取り上げていた。これにより遠い地域での、子どもから縁遠い事象として学習されることを避けることができ、その結果、ODAとNGOの果たす役割を具体的に追究でき、「説明

表3 A児による振り返りシートの記述と資質・能力の形成過程

| 時 | ノートの記述内容（獲得した概念：破線，社会との関わり：実線，既存の知識の統合：波線） |
|------|--|
| 第1時 | 記述なし（筆者記入） |
| 第2時 | パラグアイは家族や誕生日をすごく大切にす国！パラグアイは発展途上国で、日本より経済が安定していないけど、毎週日曜日には、アサードというバーベキューを家族や親せきが集まってしていた。日本じゃ考えられないけど、飲み物を回し飲みしながらコミュニケーションをとるなど、日本より家族と過ごすことを大切にしていると思った。女の子の15才の誕生日には、家族がお金を出して、すごい豪華なパーティーを開いた。学校でも教室を本格的に飾り付けて、お祝いしていると分かった。気候は、日本より暑く、降水量は少なかった。飛行機で何度か乗り継ぎをして、待ち時間を含めると2日かかるのにびっくりした。 |
| 第3時 | パラグアイは、貧富の差が大きいのと、道が整備されていないという理由から農村の子どもたちは、学校へ通い続けることができず、卒業できる子どもが少なくなると分かった。 |
| 第4時 | 世界では、発展途上国で起こる問題もあったけど、地球規模で起こる問題も少なくなかった。聞いたことのある地球温暖化などもあったけど、砂漠化など聞きなれないものもあった。地球規模で起こる問題は、人口増加⇒土地がない⇒環境破壊などつながるものがあると分かった。 |
| 第5時 | 発展途上国を支援するために、 <u>国連、政府、民間が動いている</u> と知った。 <u>見たことのあるCMが非政府組織の活動だと分かった。問題があるのは、前回の授業で分かったけど、その解決しようとする人たちのグループが3つあると分かった。</u> |
| 第6時 | ODAの資金協力の例を見ながら知ることができた。有償資金協力は、お金が返ってくるけど、無償資金協力はお金が返ってこないのに、それをして日本にメリットがあるのか疑問に思った。 |
| 第7時 | 青年海外協力隊はODAの実施機関で、120種類以上の仕事があった。仕事は誰でも良いわけではなく、資格などが必要なものもあった。私は、自分の特技を生かせるのが良いと思った。資格が必要だったりするのに、2165人もやろうと思う人がいるのがすごいと思った。 |
| 第8時 | パラグアイの授業をよくするために、伊藤先生は子どもと大人に日本式の授業を教えたり、先生に教材は作れることを教えていた。発展途上国の人は、何が悪いの？って思うことだから、その考え方を変えるのが大変そうだった。 |
| 第9時 | 日本と発展途上国で、 <u>相互理解が深まると日本で震災が起きたときに支援してくれる（相互依存）</u> 。その他にも、 <u>日本が発展途上国に支援することで、日本の信頼度が高まったり、好印象になるなどのメリットがあった</u> 。授業前は、 <u>お金が返ってこない</u> とメリットはないのではないかと考えていたけど、授業を受けてお金ではないけど、 <u>信頼や好印象につながる</u> と知った。 |
| 第10時 | 授業前は、アフガニスタンの国内の様子を全然知らなかったんだけど、授業を受けて治安が悪いと分かった。他にも多民族、多言語だった。治安が悪いことで、テロなどが起こっている。テロなどが起こることで、死んでしまうかもしれないのに、 <u>どうして近くの国に逃げないのか疑問に思った</u> 。 |
| 第11時 | 中村さんは、医者として人を助けるだけでなく、 <u>用水路を作ることで65万人の人を助けた</u> 。私は医者なのになんで？と思ったけど、よく考えると診療所があっても、 <u>何度も泥水を飲むことになる</u> と思うとすごく嫌になった。だから、 <u>中村さんはそれを分かって用水路を作ったんだ</u> と考えるとすごいと思う。 |
| 第12時 | 〇〇〇くんの発表で中村さんは、 <u>持続可能なことをしていたけど（まだ自立はできない）、ベシヤール会は無くなつては困ると分かった</u> 。本当はODAもNGOもない方が世界が平和で安全だと分かった。 |
| 第13時 | 【維持】今の国の借金を見ると減らすべきかもしれないけど、 <u>ODAで支援することで開発途上国と相互理解を深めたり、日本への信頼度が上がる</u> ことも考えると、維持するのがいいと思ったから。 |
| 第14時 | 【減らす】みんなの意見（主に△△ちゃん）を聞いて、 <u>やっぱり減らすべきだ</u> と思った。理由は、あまり減らしすぎずに維持に近い形の方が、 <u>ODAのメリットとデメリット</u> を考えるとよいと思った。 |

的知識」の獲得に成功したといえる。

第三次では、これまでのODAやNGOによる活動での学びを踏まえて、日本の国際協力の在り方を、日本のODA予算を通じて考える場面が設定された。第13時でA児は第9時で理解したODAのメリットを根拠に、ODA予算を維持することを主張した。一方意見交換を踏まえたのちの第14時の振り返りでは、他の子どもの意見を踏まえて、ODA予算を減らすことへと主張を変化させた。しかしながら、具体的に他者のどのような意見を踏まえて自身の意見を変化させたのかは、ノートの記述からは読み取ることができなかった。

3.2.2 資質・能力形成と評価

本単元は、世界のさまざまな問題を解決するために、日本によって実施されるODAやNGOの活動を事例に、表面的な理解ではなく、国際協力の意味を多面的・多角的に捉えさせながら、活動を認識させ、社会の形成に寄与する日本の国際理解の在り方を考えさせることにねらいが設定されていた。本時を含むODAおよび

NGOの事例では、子どものもつ既知や常識（ODA：無償資金協力は資金が戻ってこないため日本にメリットがない；NGO：中村哲さんは医者であり、医療を通じて人々を救おうとしている）を揺さぶる形で学習活動（教師の問いかけや資料の読み解き）が展開することで、新たな概念や見解（ODA：人的側面、信頼関係の構築；NGO：水不足という根本的問題の解決）の獲得が促されていた。また前時までに獲得した知識に基づいて、新たな概念や見解を形成するなど子どもの資質・能力の形成におおむね成功したといえる。

一方で課題も指摘できる。第三次は、日本の国際協力の在り方に対する意見形成（第13時）、そして他者との意見交換を踏まえた自己の意見の強化・変容（第14時）を意図して学習が展開された。しかしながら前述のように、A児の意見の変容背景にある他者の具体的な意見やそれに賛成したかという理由は、みることができなかった。他者との意見交換を踏まえて、自身の意見を再構築させる場合には、自己と他者の意見を比較して他者の意

見ではどのような点が優れているのかを批判的に検討し、検討を踏まえて意見を再構築させるような指導過程が必要であるように思われる。(阪上 弘彬)

3.3 資質・能力形成のための授業構成と評価

3.1, 3.2における分析結果によると、本実践の成果として、国際協力に関わる説明的知識の獲得、国の相互関係をふまえた認識形成に成功したことがあげられる。一方、課題は中村哲さんの活動の本来の目的である地域社会の問題の解決への認識、他の子どもとの交流による意見の再構築は十分に達成できなかったことである。

本単元では、第6学年におけるグローバル化する世界と日本の役割に関して、青年海外協力隊を事例に、国際交流を協力の在り方について意見を構築するという観点から授業が構成されていた。

第一次では、日本や南米諸国のGDPとパラグアイのそれとを比較させることで、パラグアイは南米の中でも貧困国の一つであること、インフラの未整備、貧困、そして子ども労働などパラグアイが抱える社会問題や紛争、貧困などのように開発途上国に集中しているといった問題に気づかせることに成功している。抽出児の学びからも途上国に関わる社会問題、世界の動向は理解できていることが読み取れることから、授業者のねらいはおおむね達成されたといえるだろう。第二次では、パラグアイのインフラ整備の前後比較をさせることを導入として、資金協力の効果による生活改善、青年海外協力隊の役割と相互依存の関係、さらには、アフガニスタンにおける問題に転じ、中村哲さんの願いとの共通点(持続可能な支援)把握を試み、授業者としては手応えを得ている。国際協力の具体の提示がねらいの達成に有効であったことが示唆される。第三次では、これまでの学びを踏まえて、ODAのメリット、日本の財政状況を対立的な判断材料として、国際協力の在り方についての見解を構築することを可能にしていた。

総じて、パラグアイやアフガニスタンといった子どもの日常生活とはなじみの薄い国家を取り上げ、それらの国の社会情勢、すなわち、日常とは異なるコンテキスト理解が国際協力の実態把握、今後の国際協力の在り方をデザインする資質・能力形成に寄与することを明らかにした点が評価できる。その要因として豊富な資料の提示により子どもが生活する社会との比較を第一次の段階から意図的に行かせていたことが挙げられる。子どもがもつ常識をゆさぶる形で他国を対比的に扱うことで、例えば第2時「日本より経済が安定していないけど…」が典型的に示しているように、対比により子どもの問題意識は高められたことが抽出児の振り返りシート記述からも読み取れる。一方、単元の評価規準として、達成されたと目される国際協力による諸外国との相互理解や相互依存にかかわる情報の収集・整理とその理解の他、多面的・多角的に国際協力の意味を考え、これからの日本の国際協力の在り方について自分の考えをもち、表現することも想定されている。特に後者の自分の考えをもち表現する部分については、具体的な活動の意味づけ及

び相互の関係把握が必ずしも十分でなかったと考えられる。具体的には、第二次における中村哲さんの医療活動と用水路建設との間の関係性、第三次における、日本の国際協力の在り方についての見解である。すでに、3.2で指摘されているように、他者の意見と比較することによる自己の意見の見直しができているかどうか不明である点、そもそも自己の意見が本当に妥当なのかどうかの議論が十分でなかったことが課題として指摘できる。

国際協力の意味、これからの日本の国際協力の在り方についての考えは子どもにより多様であろう。考えを出し合い、自分の考えと他者の考えとの間で何が一致し、何が一致しないかを議論を通して吟味・検討できるグループワークや板書を通して共有化を図ることで、既存の知識を統合して新たな知識として創造することができるのではないだろうか。本実践における抽出児のノート記述に考えの変容の根拠が示されなかったことが、新たな知識創造に関わる課題を如実に示している。

未来デザインに関わる表現活動をする際、分析的な探究活動として自他の見解の比較、自己の見解の再構築、再構築した具体を見取ることができるワークシートの開発等、子どもの知識創造を支える手だての構築ができれば、子どもの思考の変容及びその評価もより充実させることができるであろう。(山内 敏男)

4 小括—成果と課題—

2019年12月4日、アフガニスタンの州都ジャララバードで、NGO「ベシヤワール会」の現地代表である医師の中村哲さんが何者かに銃撃され、亡くなられる。長年に渡り、異国の地であるアフガニスタンの地で、医療支援や灌漑工事などの人道支援に取り組んで来られた中村哲さん逝去のニュースは、世界中に衝撃を与える。

中村哲さんは、医者でありながら、医療支援から灌漑工事、農業支援へと活動を広げた理由を問うことによって、国際貢献とは何かを考えるのが本授業の目的である。

アフガニスタンでは、農地が大干ばつによって、砂漠化していく現実を中村哲さんは、目の当たりにする。日々、医療支援に関わる中で、アフガニスタンの人たちの病気の背景に、食料不足と栄養失調があるという考えに至る。そして、「百の診療所より、一本の用水路を」を合い言葉に、2003年からアフガニスタン東部で用水路建設に着手する。2019年までに、約27kmに及ぶ用水路が開通し、16,500haの土地を潤し、砂漠を緑地に回復させ、約65万人の農民の暮らしを支えるという立派な国際貢献を続けてきた中で銃撃事件である。医師である中村哲さんが、なぜ、用水路づくりを始めたのか。子どもの感性だけでなく、知的好奇心を揺さぶる問いの設定である。世界には、195国があるが、そのうち150カ国以上が開発途上国と呼ばれる国々である⁽⁷⁾。開発途上国の多くは、貧困や紛争等の問題を抱えている。その結果、衛生事情の悪化や環境汚染、感染症の蔓延につながっている。世界がグローバル化している今、この

ような問題は、開発途上国だけの問題ではなく、国境を越えて地球全体の問題として、世界各国の協力が求められている。

そもそも国際協力には、政府開発援助（ODA）を主体とした国家間での国際協力と NGO や NPO 団体という民間レベルでの国際協力があるが、近年、企業による CSR（Corporate Social Responsibility：企業の社会的責任）活動が重要な役割を担うとともに、NGO や大学、地方自治体等、各々の専門分野で力を発揮する国際協力が推進されている。国際協力の相手国は、主にアジアの国々を中心として、①人道・貿易上必要な国、②軍事に利用しない国、③民主化・市場経済化、人権・自由の保障に努めている国などの基準を定めて選定されている⁽⁸⁾。インフラを整備したり、学校や病院などの必要な施設を建設したり、専門技術者を派遣したり、ビジネス支援など多岐にわたっている。中村哲さんは、民間レベルで、国際貢献とは何かということをもっとも体現した方である。当然、紛争地であるアフガニスタンでの活動は、危険を伴う。しかし、武器を持たない、使用しないという原則のもとに、活動を続けていた中村哲さんに対して、ほとんどの現地の人々は、敬意を払いながら感謝の気持ちで、活動を理解していたと思われる。しかし、政府側、反政府側、タリバンなどの組織対立が複雑に絡み合っているアフガニスタンという地の独特な情勢に加えて、アルカイダやタリバン、イスラム国など、ますます複雑化している国際情勢の中で、志半ばで異国の地で亡くなった中村哲さんの国際貢献とは何だったのかという「解」は簡単には出てこない。本実践の意義は、この本質的な問題に対して、中村哲さん銃撃事件が起こった直後に、時期をとらえて、子どもにエンカウンターさせ、国際貢献とは何かを考えさせる場を設定したことにある。国際協力を考える究極の目的は、「自分に今何ができるか」である。それぞれの立場で取り組む国際貢献は多義にわたっていることに対して、子どもは真摯に向き合い議論させた意義は大きい。それは、授業者自身のキャリアを活かしながら、綿密な単元構想をベースに、リアリティのある可視的な教材を次々と提示し、子どもが丹念に読解するプロセスを経ることで、子どもは実感をもって考えることができたからである。他方で、子どもの知識創造を支えるさらなるワークシート等の開発が必要であるという課題も出てきた。振り返りシートについては、本研究の重要な評価手段であるだけに、今回の反省を踏まえて、さらなる改善を図ってきたい。

（關 浩和）

【註】

(1) 本研究は、兵庫教育大学と兵庫教育大学附属小学校社会科部が中心になって継続的に研究を進めている。今年度の研究紀要執筆者として挙げている者の役割分担は、研究代表者及び研究総括（關）、研究授業者担当（伊藤）、授業事例分析担当（福田・阪上・山内・關）、研究立案及び学習指導案、授業デザインの

構想についての協力（吉水・東宇・安永・森・小寺）という役割分担で授業開発研究を行った。なお、本研究における研究仮説と仮説設定理由については、次の論文を参照されたい。關浩和・吉水裕也・山内敏男・福田喜彦他「未来をデザインする資質・能力形成のための社会科授業開発（Ⅰ）－第5学年単元『日本の工業生産（自動車産業）』の場合－」兵庫教育大学『学校教育学研究』第32巻、2019年11月、pp.53-62。

- (2) 澁谷友和「時間のマルチ・スケールアプローチによる未来予測型小学校社会科授業の開発－第6学年「私たちのくらしと税の役割」を事例にして－」社会系教科教育学研究第30号、2018年、pp.107-116。
- (3) 「百の診療所よりも一本の用水路を」という言葉は、中村哲さんが医療から灌漑・農業支援へと活動を広げた時の合い言葉となっている。アフガンを大干ばつが襲い、農地が砂漠化するのを目の当たりにして、病気の背景には食料不足と栄養失調があると考えたからである。次の文献に詳しい。中村哲『天、共に在り－アフガニスタン三十年の闘い』NHK出版、2013年。
- (4) 兵庫教育大学附属小学校では、転入学時点ですべての児童、保護者に対して、研究校であることや論文等で研究成果を発表することは許諾をとっているため、研究開発研究段階において、説明了解済みである。
- (5) Dirección General de Estadística, Encuestasy Censos (2017) 『Anuario 2015 Paraguay』
<https://www.dgeec.gov.py/Publicaciones/Biblioteca/anuario2015/Anuario%20Estadistico%202015.pdf#search=%27Anuario+2015+Paraguay%27>
(最終閲覧日：2020年7月15日)
- (6) 中村哲『アフガン・緑の大地計画－伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業』石風社、2017年。
- (7) 世界の国の情勢については、外務省が所管する独立行政法人国際協力機構（JICA）のサイトを参照されたい（最終閲覧日：2020年7月15日）。
<https://www.jica.go.jp/index.html>
- (8) 児玉昌己・伊佐淳編『グローバル時代のアジアの国際協力～過去・現在・未来～』芦書房、2020年。